

中浜 東一郎をめぐる医療人脈（その1・前編） 森鷗外と東一郎 一若き日の交友関係を中心に

塚本 宏

はじめに

中浜万次郎が幕末から明治にかけて日米親善友好の架け橋として大きな貢献をしたことは今さら言うまでもない。彼の没後すでに120年も経過している今日でも、幕末に活躍した人物のランキングで堂々、第5位（朝日新聞調査）というのは、土佐漁師出身の民間人として異例のことだろう。さらに、中浜、ホイットフィールド両家の文字通り「草の根交流」が今日まで連綿として継続していることも、「記憶遺産」的価値のあることではなかろうか。

私は、万次郎の長男、中浜東一郎の先考への尊敬の念に基づく、長年にわたるご尽力があったからこそ実現できた成果だと考えている。名著としての誉れの高い、東一郎著の「中濱萬次郎傳」に続いて万次郎の後裔である、直系三代・明、四代・博、五代・京の各氏がそれぞれ、個性豊かな万次郎の伝記を次々と執筆、出版され¹⁾、万次郎を敬愛する研究者一同に裨益するところ大であることも、二代・東一郎の影響なしには考えられない。

たまたま、東一郎と同じ生命保険業界（旧・明治生命）に身をおいたという奇縁から、会員に加えていただいた者として、東一郎なる人物に並々ならぬ関心を持ち続け、医師として生涯を生き抜いた彼の人物像を解明しようとして、彼をめぐる医療人脈を掘り起こしてみることにした。

まず、皮切りに、東一郎と同期生として学び、明治14年に「当時の」東京大学医学部と一緒に卒業した森鷗外との交友関係から始めてみることにしよう。

1 東一郎と鷗外にとっての終生にわたる二人の恩師、「長与専齋と石黒忠恵」

ア 東京大学医学部の創立までの変遷

前述の「当時の」というには訳がある。もちろん、現在のそれであるはずはなく、幕末から明治新政府による近代国家建設の激動期ゆえの目まぐるしい変遷を経た医師養成の最高学府が、東京大学医学部（第一次）であった。その詳細は「東京大学百年史」の「通史一、部局史二」に譲らざるを得ない²⁾が、その前身は、安政五年（1858）5月に開設された「種痘所」まで遡る。場所は、神田お玉ヶ池松枝町誓願寺前、川路聖謨名義の下屋敷内（現千代田区岩本町2丁目）にあった。

その後、明治中期までの名称、組織などの変遷を年表で要約すると次の通りとなる。

安政六年（1859）：最初の種痘所は類焼により全焼したため、下谷和泉橋通りの津藩藤堂和泉守上屋敷に種痘所（第二次）を新築

文久元年（1861）：種痘所を「西洋医学所」と改称、つづいて文久三年（1863）に「医学所」と改称（頭取・松本良順）

明治元年（1868）：医学所を「大病院」（藤堂邸）に含め、昌平学校の所管となる

明治二年（1869）：大病院を「医学校兼病院」と改称し、昌平学校を「大学校」と改称し、これに医学校兼病院を属させ、さらに「大学」と改称して医学校兼病院を「大学東校」と称した

明治四年（1871）：大学東校を「東校」と改称し、文部省所管とする

明治五年（1872）：文部省の新学制により東校を「第一大学区医学校」と改称（長谷川泰・校長、相良知安・校長）

明治七年（1874）：第一大学区医学校を「東京医学校」と改称、長与専齋、校長となり本郷旧加賀藩邸に新築の建議

明治九年（1876）：下谷和泉橋通りから本郷の新校舎へ移転開始、新病院の業務開始

明治十年（1877）：医学校を開成学校と合併し、「東京大学」創立。医学校は「医学部」と改称（医学部総理・池田謙齋、総理心得・長与専齋）

明治十二年（1879）：東京大学医学部の第一回学位授与式（「医学士」、本科生18名

明治十三年（1880）：学位授与、本科19名

明治十四年（1881）：学位授与、本科28名

明治十九年（1886）：帝国大学令公布、医学部は「帝国大学医科大学」と改称（初代医科大学長、三宅秀）

随分、端折ったつもりながら、一読して変遷の激しさをご理解いただけたであろうか。急速な近代国家の体制づくりに腐心していたとは言え、その医師養成制度だけをとっても、まさに目まぐるしい激変ぶりと言うしかない。こういう時期に、東一郎、鷗外は、わが国最初の医科大学を卒業して新時代の医者として第一歩を歩み始めたのである。

イ 長与専齋（1838－1902）

ここで、長与専齋こそ、校長になるべくして校長になり、名実ともに東大医学部（第一次）の基礎を作った人物だったことをもう少し詳しく語ることにしよう。

天保9年、肥前大村藩医の子として生まれ、大坂の適塾（塾長・緒方洪庵）に入門、のち塾頭に上げられた後、長崎に赴き、ポンペ、ボードイン、マンズフェルト等からオランダ医学を学び、明治元年、長崎精得館頭取に就任、同4年、上京して文部少丞・中教授となり、岩倉具視の遣欧使節団の一員として、医学教育、医師制度の調査に従事し、帰朝後、文部省医務局長、同8年に医務局を内務省に移して、初代「衛生局長」に就任、以来17年間にわたり、わが国の衛生行政の基礎を築いた。「医制の制定」、医師・薬剤師の試験制度の発足、防疫・検疫制度の導入、衛生試験所・牛痘種継所の創設など衛生思想の普及に貢献した。今日の衛生行政の基礎は彼抜きに語れないのである。

長与専齋の自伝「松香私志」³⁾によると、もともと、岩倉使節団で英米視察の際、「サニタリー（sanitary）」、「ヘルス(health)」の言葉を耳にし、ベルリンでも「ゲズンドハイツプレーゲ(Gesundheitspflege)」の語は度々聞いていながら深く心に留めなかったが、調査が進むにつれて、「国民一般の健康保護を担当する特殊の行政組織」であることに気付き、「……その本源を医学に資り理化学、気象、統計等の諸科を包容してこれを政務的に運用し、人生の危害を除き国家の福祉を完うする所以の仕組にして、……およそ人間生活の利害にかかれるものは細大となく收拾網羅した、国家行政の重要機関」のことだ、と発見するに至った。とくに有名なのは、医務局を文部省から内務省に移管するに際して、原語を直訳して「健康もしくは保健などの文字」を使おうとしたが、「露骨にして面白からず、……ふと『莊子』に衛生とえる言あるを憶いつき、…字面高雅にして呼声もあしからずとて、つい

に健康保護の事務に適用し……、かく称呼の広く行われるに随いて自然にその意味も人心に感通するに至りしは、思いもよらざる幸い」だと満足している。

このように今日では、「衛生の祖」というだけがありに有名ではあるが、ベルリンでの医学教育の調査で、長崎時代、マンスフェルトからその大要は聞いていたし、自らも精得館頭取として小規模ながら経験を積んで入るものの、「本場の大学に就き目のあたりに規模の広壮にして元気の鬱勃たるを見、また矍鑠たる老先生顔を揃えて各専門の教授を担当し、銘々に数名の助手を随え研究室を備え、濟々たる多士脇目もふらぬ研学の有様を目撃するに及びて深く心に感激し」、振り返って東京医学校では、解剖、生理等の学科にはまだ受け持ちの教師もいない不完全な状態ゆえ、外国人教師の招聘が重大事だと感じて、まずは一人だけだったが、解剖学教師（デーニッツ）と契約して帰ったという実績もある。長男・称吉作成になる「松香私志」巻末の年譜によると、明治19年に内務省衛生局長・専任になるまでは、間違いなく、草創期の東大医学部の基礎作りに大きな功績を残したのであった。

ウ 石黒忠憲（1845－1941）

二人目の恩師、石黒忠憲（ただのり）に登場願うことにしよう。すぐにお気付きになろうが、弘化2年、陸奥国伊達郡梁川に生まれ、昭和16年、東京・牛込の自宅で天寿を全うする（満96歳）まで、当時としては稀に見る、「勲功高き」長寿者であった。最晩年、口述筆記で作成した彼の自伝「懐旧九十年」（博文館、昭和11年）を参照してどんな人物だったか紹介しよう。なお、彼は、「況翁」と号した茶人で、柳田国男から「座談の名人」と評された人だけに、その期待に違わぬ名著で、事実は小説よりも奇なりを地で行くエピソードが満載、興味のある向きにご一読をお勧めしたい⁴⁾。

この自伝によると、石黒は文久三年（1863）に江戸へ出て、幕府の医学所で松本良順の薫陶を受けて卒業後、医学所「句読師」になったが、維新の変に際して幕府軍に参加した師匠・松本良順とは一旦、袂を分かつが（佐久間象山の影響で勤王派だった）、明治二年（1869）に再び上京して、文部出仕、「大学東校」へ奉職、翌年には、大学少助教兼少舎長に任官した。

すんなり大学人になると思いきや、上司と対立して退職するものの、松本良順の勧めに従い、兵部省軍医寮に出仕（明治4年）、その後は「順当に昇進」して陸軍軍医総監、さらに軍医の人事権をにぎるトップ、陸軍省医務局長（明治23年）にまで上り詰める。政官界の大物、山県有朋、大山巖、児玉源太郎らとも懇意で、医学・医療分野で隠然たる影響力を行使し、貴族院議員、日本赤十字社・社長、中央衛生会・会長などを歴任した。

ここでも「順当」ではない、ハプニングがあった。奇しくも明治9年に、陸軍省から米国出張（フィラデルフィア・万国博覧会視察のため）した際、長与専齋・内務省衛生局長と往復同行した縁であろうか、明治12年、大学医学部綜理・池田謙齋から長与が内務省の本務が多忙で、文部省と兼務できないのでぜひ長与に代わってもらいたいとの要請があり、長与本人もしきりに頼むので、承諾することになった（文部省御用兼務・東京大学医学部・綜理心得）。2年間という短い兼務期間に、「せつせと医学教育に尽くし、学者・人物を造ることに協力（医学士の学位授与を実行、卒業生の官費留学実施、参考書籍の購入（2年分の報酬を悉皆寄附して）など）」をした。

ちょうど、この時期に東一郎、鷗外両名が卒業を目指して勉強中であつたのである。恩師の恩師たる所以がここにある。

2 当初は「衛生学」を志した東一郎と鷗外

ア ドイツ留学まで

東京大学医学部を明治14年に卒業した同期生とはいえ、彼らの学童期は、いまだ学制発布（明治5年）以前なのでまちまちな経路で入学している。安政4年生れの東一郎は、幼少より家庭内で父・万次郎の薫陶を受けて早くから洋語を教わり、7、8才で始めて大鳥圭介、矢田部良吉らから英学を学び、明治5年には、横浜十全病院に入り、院医・セメンズの通弁を兼ねて医学の修業をしたが、思うようにならず、東京に戻って明治6年、大学東校に入学している⁵⁾。

一方、鷗外は、文久2年に石見津和野藩の藩医の家に生まれ、藩校・養老館で漢学、蘭語を学んだ後、父・静男とともに上京、ドイツ語習得のため、進文学舎（本郷元町にあった）に通学し（そのため、同郷の先学であり親族でもある西周⁶⁾宅に奇遇）、明治7年に東京医学校へ入学した。当時の規則で入学は年齢14歳から19歳であったので、万延元年生まれと詐称した（戸籍法が完備していな時期だから出来た）という話は有名であると同時に鷗外の秀才ぶりを物語るエピソードでもあろう。

彼らの医学生時代には、すべて「寄宿舎」住まいでお互いに親密な付き合いが出来た⁷⁾のだが、娯楽といえば日曜日に寄席に行くことぐらいで、勉強に明け暮れ、無事に卒業することは至難の業だった。詳細な数字は残されていないが、同期生の小池正直を例にとると、「同時に入学して、約62名中創業に達した者は僅々15名のみ、医学の難しき以て知るべし」（『男爵小池正直伝』）と記されている。

すでに明治2年には、わが国の洋医学はドイツ医学を基礎にすること決定しているのだから、彼らは、ドイツ人医師の授業を受けている。解剖学をデーニッツ→ギールケ、外科学をウェルニヒ→シュルツェ、内科学をホフマン→ベルツの諸先生から学んだことになる。

明治14年、東京大学医学部・3回生として卒業したのは28名、卒業成績は東一郎第3席、鷗外が第8席だったことはよく知られている。参考までに、第1席から第10席までの氏名と年齢を列記してみると、次の通りである⁸⁾。

- ① 三浦守治（24年5カ月）、② 高橋順太郎（25年5カ月）、③ 中浜東一郎（24年）、
- ④ 伊部 彝（25年5カ月）、⑤ 佐藤 佐（24年7カ月） ⑥ 片山芳林（26年7カ月）
- ⑦ 甲野 棐（25年7カ月）、⑧ 森林太郎（19年8カ月） ⑨小池正直（26年7カ月）
- ⑩ 熊谷幸之助（23年8カ月）、……（以下略） 鷗外だけは20歳にも達しておらず、もちろん最年少の卒業生であった。

卒業後直ちに、東一郎は、福島医学校長兼教授を命じられ（明治14年4月11日付）、翌15年1月には岡山県病院一等医員兼教授に転じ、さらに18年2月には石川県金沢病院長兼石川兼甲種医学校長一等教諭に就任する。⁹⁾

一方の鷗外は、卒業成績のため文部省から直ちにドイツ留学をする希望はかなわず、約半年間、自宅で開業医の父を手伝いながら、留学に有利な就職の道を模索、奔走する日々を送る。幸い、陸軍給費生だったので先に任官（陸軍軍医副）していた小池が、同級生・鷗外を陸軍に迎えるため、時の軍医本部次長・石黒忠恵あてに送った漢文の推薦状（名文で「此人蓋し千里之才なり」と激賞している）が功を奏して、小池らに遅れること5カ月、14年12月に陸軍軍医副に任官（東京陸軍病院課僚）し、軍医としての一步を印すこととなる。ここから、上司としての石黒と、同期ながら7才年長の先輩にあたる

小池の二人は、鷗外にとって生涯にわたり頭の上がらぬ存在になったのである。

註

- 1) a 中濱東一郎『中濱萬次郎傳』(富山房、昭和11年)
b 中浜 明『中浜万次郎の生涯』(富山房、1970年)
c 中浜 博『私のジョン万次郎』(小学館、1991年)
d 中浜 博『中濱 万次郎』(富山房インターナショナル、2005年)
e 中濱 京『ジョン万次郎』(富山房インターナショナル、平成20年)
- 2) a 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史・通史一』(東京大学出版会、1984年)
b 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史・部局史二』(東京大学出版会、1987年)
- 3) 長与が子孫のために書き残した自伝、本人の没後に、長男称吉(長与胃腸病院長、男爵)が上梓して親戚・知人に配布した(明治35年)。衛生、医療制度について資料的価値の高い名著。『ワイド版東洋文庫・松本順自伝・長与専斎自伝』(平凡社、2008年) なお、三男・又郎(病理学者・東京帝大総長)、四男・岩永祐吉(同盟通信社・社長)、五男・善郎(白樺派作家)、次女・仲子(犬養健の妻で、犬養道子(評論家)は孫)、等々華麗な家系を誇る。
- 4) 2, 3例示すると、ドイツ医学輸入の由来を詳しく語っている箇所、興味深いのは、維新戦争の際に負傷兵の治療に活躍した明治政府の恩人ともいえる英国人医師・ウィリス(1837-94)を首都で勤務させるとドイツから医師を招聘することが困難とみて、陸軍大将・西郷隆盛に彼を薩摩にて高給で所遇するよう依頼して成功させたというのである。また、上野公園も日比谷公園も石黒の斡旋で完成したし、逗子海水浴場を世間に知らしめたのも彼でした。理論派というより実践・行動派と言っても良いだろう。『懐旧九十年』(岩波文庫として復刻、1980年)
- 5) 花房吉太郎、山本源太『日本博士全伝』(博文館、明治25年)、復刻版(日本図書センター、1990年)「医学博士中濱東一郎君」の項による。なお、横浜十全病院・院医セメンズというのは、シモンズ(Duane S. Simmons、1834-89)のこと、アメリカの医師、宣教師のこと。横浜病院、十全病院(ともに横浜市立大学病院の前身)に勤務、当時の名医・ヘボンと並び称された。
- 6) 西周(にしあまね、1829-97)は、明治時代初期の官僚(兵部省、文部省、宮内省)、啓蒙思想家、教育者。オランダ留学前に、中浜万次郎から英学を学ぶ(川澄哲夫編著『中浜万次郎集成』(小学館、1990年)。鷗外は、曾祖父が西の祖父(西の従甥)という関係から、ジョン万次郎繋がりで、東一郎に親近感を持っていたであろうと推測できる。
- 7) 「東一郎日記」には、明治30年代に、「和泉橋同窓会」が度々、催された(東一郎も幹事の一人)ことが記されていて、恐らく出席者は、寄宿舎で過ごした青春時代を懐かしんでいたものと思われる。
- 8) 秀才だったと言われる鷗外が、なぜ8番だったのか、諸説あるが、ここでは、浅井卓夫説を紹介しておこう。論者の多くが挙げている不成績の原因として、①試験前に肋膜炎に罹患して体調が悪かったこと、②ドイツ人教師シュルツェにいらまれていたこと、③下宿の火災に遭ってノートを焼いてしまったことの3点であるが、浅井は、②と③については、考証の結果、否定して、肋膜炎による体調不良を主な原因にしており、他の要因として、本科の高学年で主体となる臨床医学に興味を持てなかったことも考えておくべきであろうとしている。浅井卓夫『軍医鷗外 森林太郎』(教育

出版センター、昭和61年)による。

- 9) 東一郎の「辞令類」は、中浜明が提供した7点が丸山博により公開されているので、長谷川泉編著『森鷗外の断層写真』(至文堂、昭和59年)の丸山博「中浜東一郎と鷗外」(243-245頁を参照。また、岡山医学校では、肝臓ジストマ、肺臓ジストマの発見という業績も残している(『日本博士全伝』)。